

## 巻頭言

イギリスではエリザベス二世の在位 70 周年を祝う、いわゆるプラチナ・ジュビリーの祝典が開催され、賑やかな様子が放映されている。イギリス皇室が紆余曲折を経て、なおも国民から支持をうける存在であることが分かる。小学生の頃に、彼女の戴冠式の場面を見た。小学校の講堂で青年団が資金集めに開催する映画会での記憶である。当時の明仁皇太子が戴冠式参列のために英国に到着したニュース映画に、出迎えている邦人の列に留学中の村の開業医の一人息子が写っており、フィルムを切り取ってもらっていたのを鮮明に覚えている。その留学中の医者は、後に京都大学の内科教授となり、滋賀医科大学の初代学長となった人である。子どもの頃に世話になった医院はもう無いが、実家から 5 軒離れた、堀に囲まれた樹木の中にある家屋敷はまだ朽ちずにある。

70 周年には遥かに及ばないが、『人間環境学研究』は 20 年周年を迎えることができた。継続できたことは嬉しいことであり、このことを可能にしたユニオンプレスの尽力と、論文を投稿していただいた方々、論文の査読に協力いただいた皆さんのおかげである。まず、この企てを始めたものの一人として、感謝申し上げたい。

大抵の場合、意気込んで発刊される雑誌は 3～4 年で終わることが多い。投稿される論文が集まらないこと、意気込んでいた同人たちも加齢により気力や体力を失っていくことが、一般的である。本誌が 20 年も継続できた要因は何かを振り返り、考えてみたい。

発刊当時の文系学問領域の学会誌の特徴に、投稿してから発刊されるまでの時間の長さがあったと思う。この点を改善したのが要因の一つであろう。筆者が知る範囲では、投稿論文は月に 1 度あるいは隔月で開催される編集委員会で、誰に論文査読を依頼するかを決定し、それから査読者に論文が送られて、その結果を待つシステムが一般的であった。査読依頼をされた研究者は、受け取った論文を直ちに読むということは稀で、編集委員会からの催促を 1、2 度受けてから作業をはじめることが多かったように思う。原稿の催促を受けること、締め切りを守らないのは一人前の研究者の常識のように考えている場合が少なくなかった。郵送時代での査読に要する時間は、1 年あるいはそれ以上かかるのが珍しいものではなかった。したがって論文を投稿してから掲載されるまで 2 年以上かかることは決して稀ではなかった（今でも変わらないと指摘される向きもある）。

一方海外の学術誌では、当時であっても査読結果は 2～3 月で判明するのが普通であった。海外では編集長が査読者を決定し、期限をつけてその結果を戻すように強い権限をもっているのが迅速な査読システムであるように思い、編集代表が独断で適当と考える査読者を決める仕組みを採用した。このような独断は、掲載可否に間接的ではあるが影響を及ぼすが（そのバイアスを避けるために学会誌では編集委員会を開催し、査読者を選ぶ手続きを加える。しかし、そのために時間が長くなるデメリットが生じる）、海外雑誌にまねた査読システムを採用したことが一定の評価を受けて、投稿数を確保できているのではないかと思う。これが第一の要因である。

別な要因に、本誌発行を決断した時代は、学術的な業績それも査読論文を重視する傾向が急に強まった時期で、それ以後継続していることがあろう（このような傾向に問題がないわけではないが）。論文数で計られる業績重視の傾向がすでに一般的であった理系分野の特徴が、文系学問分野にも敷衍してきた時期であった。投稿した論文の掲載決定を早くし、定期的に雑誌を刊行することが新しく学術雑誌を発刊する上での重要な要因であると考えたことは間違っていなかったということであろう。本誌では編集代表が自己責任で査読者を指名し、1～2 週間程度で結果を戻してもらうことを強くお願いした。論文を投稿した場合にはできるだけ早くその結果を知りたいはずという、自分の経験を踏まえての対応策であった。査読を依頼した研究者には負担であったと思うが、早く査読結果を返すように努めたことが一定の評価を受けて、投稿数が減少しなかったのではないかと思える。

本誌の場合、投稿があった直後に、編集代表にメールで投稿原稿が送付され、ただちに査読者を決定する作業を行ってきた。自分の仕事が山積している場合も少なくなかったが、査読者の決定のために、日を置かず投稿論文に目を通すことを行ってきた。おかげで様々な分野で人間行動に関わる研究が行われている実態を知ることができた。時間を取られることの対価としては充分と考えてきたのも、これまで継続できた理由かもしれないと思う。

さらに、本誌が一定の投稿を集めることができている第三の理由には、依然として文系での学術雑誌が少ない、発表の場が少ないという条件もある。ニッチを埋められているということかもしれない。

さて、本誌を存続させる意義を指摘せよと問われれば、触れておきたいことがある。それぞれの学術分野で「トップレベルの業績が公開されるべきであり、それ以外の論文を世に出すのは、粗大ゴミを作っているだけだ」と、今は亡き皮肉屋の友人ならば言うと思うが、彼には、すべての研究者が一気にトップレベルの研究発表ができるわけではない、研究発表の修練の場は必須である。それも隣接する関連するかもしれない研究領域の研究を目にする機会を得ながら、というのは意味があると思う。若い研究者を育てるために必須のプロセスだろうと、次に彼と逢うことが叶ったら反論することだろう。何事も自分の力だけで解決し、道を開いていける研究者がいることは承知しているが、しばらくの間先達に頼ることで、自立して行き、次世代を育てる研究者となる者が居るはずで、母集団は後者の方が多くであろうと、僭越だが考えている。

本誌のこれまでの20年の発刊によって、新たに研究職を獲得した、研究費申請書が書きやすくなった、プロモーションに有効に寄与した、という類のニュースも時々耳にすることがあるのは嬉しい限りである。教育公務員として禄を食んできた者の、ある形式での社会への恩返しの一部であると見做してもらえれば、これまで本誌にシェアした時間には意味があり、嬉しいことである。

いずれにしても、多数の投稿者のおかげで成立する雑誌であり、そのことが可能であったために20年間継続できたわけである。改めて、これまで投稿していただいた研究者（中には掲載に至らなかった場合を含めて）、査読に協力して頂いた研究者、そして大した利益を生まないのに発行してくれたユニオンプレスに感謝申し上げる。

「始まったことは終わりがある」ことは真理と考えるので、いつまでこのような出版作業が可能であるかわからないが、本誌が英国女王のように長寿でいられるか否かは投稿される論文が維持増加できることに掛かっている。引き続き『人間環境学研究』を愛読し、投稿をお願いして、感謝の言葉に替えたい。

2022年6月3日  
創設編集長 八田 武志